

『美しすぎる男』

著：愁堂れな

ill：蓮川 愛

「京さん、ただいま戻りました」

ここはT大学のとある法医学教室。ドアを開き、明るい声で室内に入ってきた助手、後藤嶺路を、この室の長である准教授の廣瀬京は笑顔で迎えた。

「お疲れ。何か疑問は出なかったか？」

「気になるのなら自分で行けばよかったのに」

口を尖らせ、ぼそりと告げた後藤の後頭部を京はいつものように軽く叩くと、

「痛」

と大仰に痛がってみせた彼の頭を、それに相応しい強さで叩き直したあとに、

「で？ 疑問は？ 出たか？」

と再度問うた。

「出たような出なかったような、ですかね」

「なんだそれは」

呆れた京がまた手を上げようとしていることに気づいた後藤が、

「マジ勘弁してください」

と悲鳴を上げる。

「京さん、ガタイいい上に、柔道四段でしょ？ 京さんの的には軽く叩いたつもりでも、受けるほうのダメージたるや、物凄いですから」

「レージもそんなチャラそうな形をして、柔道は黒帯だろ？ 素人相手ならもっと加減をするさ」

肩を竦めた京の外見は、実に特徴的なものだった。

身長は百八十八センチもあり、後藤の言葉どおり、鍛え上げられていることがよくわかる、筋骨隆々といった体つきをしている。

これもまた後藤の言うとおりの、柔道四段ではあったが、それ以外にも剣道も四段、合気道は五段という腕前だった。

よく、ハーフかクォーターに間違えられる、濃い顔立ちである。端正、という言葉が実に相応しい精悍な二枚目なのだが、本人は己の外見に対してまったく興味を持っておらず、髪も鬱陶しくなるまで伸ばしっぱなしだし、髭もいい加減にしかあたららない。

普通の人がそうした状態にあると『ムサイ』という印象を周囲に与えかねないが、京はその恵まれた容姿ゆえ、『ワイルド』『男くさい』と評される。今は監察医としての仕事がメインとなったため教壇に立つことはなくなったが、講義を受け持っていたときには女子学生の比率が著しく高い上に出席率もやたらといいことを教授たちから羨ましがられたものだった。

「チャラって、酷いなあ」

口を尖らせた後藤に向かい、雑談はここまで、と京が先ほどと同じ問いを發する。

「それより、解剖所見についての捜査会議の反応を教えてくださいよ」

「報告したいのはやまやまなんですが、本当にネタがないんですよ」

そう言うと後藤は、彼の癖である、大学の研究室勤務には似合わぬ長めの茶髪を梳き上げる仕草をし、更に言葉を続けた。

「というのも、僕が解剖所見を届けたとき、まだ会議は始まってなかったんです。なんでも今日、立川署から配属になった刑事がいて、ちょうど挨拶をしているところにぶち当たってしまったもので」

「へえ、この時期に、しかも所轄からの異動とは珍しいな」

興味をそそられた京だったが、後藤は更に彼の興味を煽るような言葉を口にした。

「その上、凄い美人なんですよ」

「女性の刑事か。ますます珍しい……なんて言ったら怒られるか」

肩を竦めた京に向かい、後藤がにや、と笑ってみせる。

「確かにその発言はフェミニストたちに怒られそうではありますが、今回はセーフです」

「セーフ？」

なぜだ、と眉を顰めた京に後藤が答えを与える。

「男なんです」

「男？ 美人って言わなかったか？」

男であれば『イケメン』とか『ハンサム』などの表現になりそうなものだが、と首を傾げた京に後藤が、

「見れば納得ですよ」

と告げたそのとき、部屋のドアがノックされたと同時に大きく開いたものだから、京をはじめ室内にいた後藤や他の助手たちは誰が入ってきたのかとそのほうを見やった。

「すみません、廣瀬先生、いらっしゃいますか？」

入ってきたのは若い男だったのだが、彼の顔に京もその場にいた皆も、声を失い見入ってしまったのだった。

三十一年の人生の中で、京はこれほどまでに美しい人間を見たことがなかった。

服装は紺のスーツに地味なネクタイであるのに、本人の持つ華やかさゆえ、文字どおり彼の周囲が輝いて見える。

まさに『美貌』としか表現し得ない顔だった。きりりとした眉、成人男性にしては大きな瞳は、長く濃い睫に縁取られている。

すっと通った鼻筋、厚すぎず薄すぎない形のよい唇。まさに神による完璧な造形ともいべき整った形のパーツが白い小さな顔の中にこれまた完璧に配置されている。

その肌もまた透明感があり、輝くほどに美しかった。過ぎるほどの美は現実味を奪うもので、京は一瞬、自分が夢でも見ているかのような錯覚に陥った。

「……あの、ここ、廣瀬先生の部屋ですよ？」

返事のないことを訝ったらしい彼が眉を顰め、再度問いかけてきたのに、ようやく我に返った京が男に声をかける。

「廣瀬は俺だが、君は？」

「本日付で捜査一課に配属となった藤川です」

言いながら『美人』が一藤川と名乗った男が、内ポケットに手を入れ、取り出した警察手帳を開いて廣瀬に示してみせる。

「藤川……レイラ巡査部長」

墨痕鮮やかに書かれた名前と階級を読み上げたあと、珍しいなと思った京はつい、

「レイラ？」

とカタカナ表記の彼の名を呼び直してしまった。

「聞かれる前に言うておくが自分はハーフではないし、当然ながら本名だ。ついでに言うて名前話題で引っ張られるのはあまり好きじゃない」

途端に藤川が、立て板に水がごとく一気にそうまくし立ててきたのに、京は最初啞然としたが、すぐに苦笑した。この名前なら仕方がないかと思えたからである。

「何が可笑しいんです？」

だがその笑いをどうやら『嘲笑』ととったらしい藤川が美しい眉を顰め、問い質してきたため、誤解だ、と慌てて首を横に振る。

「いや、ただ、親がクラブトンのファンなのかと思っただけだ。俺もファンなので」

京が笑ったのは、実は、自分もまた自己紹介のたびに『京』という名前について毎度同じような内容で一京都の出身なのか、や、読み方が『けい』とわかると、親が数学者なのか、といったようなことで一突っ込まれるので、うんざりする気持ちはわかると思っただけだった。

だが初対面の相手にいきなりシンパシーを語られても、ありがた迷惑だろうと思い、敢えてそう答えたのだが、それがますます相手の気分を害することになるとは想像だにしていなかった。

「ああ、『愛しのレイラ』ですね」

横から後藤が茶々を入れた挙げ句、ギターを弾く真似をしながら、有名すぎるその曲のイントロを口で奏でてみせたのがまた、気に障ったらしい。

「名前話題は好まないと言ったはずだが」

むっとしているのを隠そうともせず、藤川はそう言い捨てると、いきなり京の目の前にA4サイズの紙片を突き出してきた。

「え？」

一瞬、なんだかわからず戸惑いの声を上げた京だったが、すぐにそれが先ほど自分が後藤に届けさせた解剖所見とわかり、藤川の来訪の意図を察した。

それで笑顔で対応しようとしたのだが、それより前に藤川が告げた言葉を聞き、つい、むっとしてしまっただけだった。

「この解剖所見、あきらかに間違っているだろう。いい加減な仕事をされては困る。即、やり直してくれ」

「ちょっと待て」

頭ごなしに『間違っている』と決めつけられてはさすがに黙ってられない、と京もまた厳しい顔になり藤川を真っ直ぐに見据えたまま言葉を続けた。

「疑問は出ると想定していた。が、解剖から導かれた結論は書いたとおりだ。遺体からあきらかになっ

た真実は何度やり直そうが変えようがない」

監察医になって二年、京は彼なりの『仕事に対するポリシー』を貫いてきた自負があった。

解剖に回されてくる遺体は、『不審死』を迎えた者であり、他者により命を奪われたケースが——いわゆる殺人事件の被害者であることが多い。

自らの意思ではなく命を奪われたと思われる遺体が現世に遺した最期の声を、解剖により余すところなくすべて聞き取ろう、というのが京のポリシーなのだった。誠心誠意、遺体と向かい合い遺体が放つ声に必死で耳を傾ける。

それを『間違っている』と言われては反論せざるを得ない、と京は、目の前に差し出された解剖所見を奪い取ると、それを示しながら藤川に説明を始めた。

「いいか？ 君ら警察は殺人事件にしたいんだろうが、結論から言えばこれは自殺だ。致命傷となったこのナイフの角度、これは決して……」

「あり得ない。自殺のわけがないんだ。自殺に見せかけた殺人だ。自分で書いた解剖所見、ちゃんと読んでいるのか？」

藤川はまるで京の言葉を聞こうとせず、逆に京に向かい暴言を吐いてきた。

「……………」

読んでいるに決まっている、と憤るより前に京は、藤川がなぜ『自殺のわけがない』という考えに至ったかを確認した。

同時に、配属早々、やらかしたのではないかという可能性にも気づき、なるほど、そういうことか、と一人頷く。

「黙ってないで答えてもらおうか」

京の沈黙をどうとったのか、藤川が尚も詰め寄ってくる。

「……君の言う『解剖所見を読んだか』は、被害者が末期癌で余命はもってあと三ヶ月なのに、自ら命を絶とうとするわけがない、というところだろう？」

「そうだ。主治医に確認したところ、本人への告知はすんでいるとのことだった。三ヶ月後に死ぬことがわかっている人間がなぜ今のこの時期、自ら命を絶つ？ しかも被害者の体調は悪く、一人では起き上がるのがやっとだったという。自殺の理由はない。だが、彼がこのタイミングで殺される理由ならある」

京の言葉にきっぱりと頷いたあと、滔々と喋り続ける藤川の顔に、京をはじめとする法医学教室の皆はつい、見惚れてしまった。

白皙の頬が紅潮し、黒曜石のごとき瞳は微かに潤んでキラキラと美しい輝きを放っている。

長い睫。薔薇色の唇。生身の人間とは思えない美しさだ、と自身でも気づかぬうちに見入ってしまった京は、藤川から、

「おい、聞いているのか！」

と怒声を浴びせられ、はっと我に返った。

「悪い。あまりに綺麗で見惚れてた」

京としては感じたとおりを正直に言っただけだったのだが、それを聞いた藤川の顔色が一気に変わった。

「ふざけてるのか？ 俺は捜査の話をしてるんだが」

「わかってる。悪かったよ。でもなんていうか……」

あからさまにむっとしている藤川の、その顔もまた美しい、と見惚れそうになり、今日は慌てて頭を振ると改めて藤川を見やった。

「しかしほんと、『美人』だな。聞いたとおりだ」

いやはや、と感心した声を上げ、『美人』の情報を与えてくれた後藤を見やったそのとき、不意に伸びてきた手に襟首を掴まれ、京はその手の主である『美人』を――藤川を、啞然として見やった。

「なに？」

襟元を締め上げられ、何事か、と目を見開いた京にぐっと顔を近づけ、藤川が顔に似合わぬドスの利いた声で凄んでくる。

「いい加減にしろ。俺は真面目な話をしに来たんだ。ふざけるなって言ってるんだよ」

「ああ、悪い。ふざけたわけじゃない」

確かに、今までの自分の言動は『ふざけている』ととられても仕方がなかったかもしれない。それにしても、綺麗な見た目を裏切る喧嘩っ早さだな、と呆れた京は己の襟首を掴む藤川の手を手首を掴んで外させようとした。

「ん？」

しかし、華奢とっていい細さであるのに、彼の手はびくとも動かない。これは相当鍛えているな、と、京は一瞬本気を出しかけたが、今は対抗している場合じゃないかとすぐに思い直した。

「ともかく、不快にさせたのなら悪かった」

話を解剖所見に戻そう、と、襟首を締め上げられたまま頭を下げた京だったが、続く藤川の言葉は彼にとっては聞き捨てならないもので、抑えたはずの本気をつい出してしまったのだった。

「普段からそうしてふざけているから、こんなふざけた解剖所見を出してくるんだろうが」

「ちょっと待て」

文字どおり『命を削って』やっている仕事に関して『ふざけている』と決めつけられ、京の頭に血が上った。

藤川の手首を再び掴んで強引に外させると、彼がその手を動かすより前に今度は京が藤川の襟首を掴み、締め上げた。

「……っ」

藤川が京の手首を掴み返してきたが、外させるものか、と睨み付け口を開く。

「俺はふざけた男かもしれないが、監察医の仕事には命をかけているんだ。『ふざけている』『間違っている』とお前は決めつけているが、まずは俺の話を聞けよ。それから判断しろ。単なるお前の思い込みで、俺や俺と一緒に遺体と真剣に向き合ったここにいる皆の仕事を馬鹿にするな！」

もともと京は声が大きい。しかも最も広い階段教室での講義でもマイクを使ったことがないというほど、よく響く声質をしていた

狭い室内では、戸棚のガラスがビリビリと震えるほどの迫力ある怒声に、藤川は虚を衝かれたような顔になっていたが、すぐさま唇を噛むと、再び京の手首を掴んできた。

「……………」

言うことは言った。少し気がすんだこともあり、京は藤川が力を入れるより前に彼の服を離し、床に落としてしまった解剖所見を拾い上げる。

「被害者は確かに余命三ヶ月と宣告されていた。だから自殺はない、という先入観を被害者も利用しようとしていたのではないかと思う。死因はナイフで背を刺された結果の失血死。いわば『刺殺』だが、おそらく椅子にナイフを固定し、後ろに倒れかかることで体重をかけていったのだと思われる。それなら体力は使わないし、加えてダイニングの椅子の背にナイフの跡が残っていた上、遺体の後頭部には倒れ込むときに椅子の背にぶつけたと思われる小さな瘤ができていた。勢い余ったんだろう」

「.....しかし、それだけでは自殺と.....」

断定できないのではないかと告げようとする藤川に先回りをし、京は説明を続けた。

「ナイフの角度も問題だ。被害者の身長は百五十センチ弱と非常に低い。その被害者の背にナイフは上向きの角度で刺さっていた。柄が身体に食い込むほど、一気にグサッと。一体どういう体勢で加害者は被害者の背を刺したんだ？ 被害者は床に倒れていた。ということは立っていたか、もしくは床に座っていたか、だ。寝ていたところを刺したにしても、横向けに倒れていたのだからナイフをその角度で突き立てるのは困難だろう」

「.....しかし.....椅子など、遺体の近くにはなかったはずだ」

理路整然とした京の説明に、藤川はようやく耳を傾ける気になったらしい。眉を顰めつつそう言葉を挟んできた彼に、京はそうだと深く頷いた。

「第一発見者に協力を頼んだのではないかと思う。確か長年勤めていた家政婦さんだったよな？ 椅子を片付けることと、もう一つ、手袋を外すことを頼んだと推察できる。遺体の爪のところ、ささくれになっていたんだが、白い繊維が微かに残っていた。薄手の綿の手袋ではないかと見ている」

そのことも解剖所見には書いたはずだが、と京は自分の記した書類に目を落とした。

「悪かった」

それとほぼ同時に、目の前にいた藤川に深く頭を下げられ、視線を彼へと戻す。

「他殺に違いないというのは俺の思い込みだった。解剖所見を熟読した上でここに来るべきだった。捜査会議でこの解剖所見のとおり、自殺の線が濃厚という結論が下りそうになったのが信じられずに、思わず来てしまったんだが.....」

ここで藤川は一旦顔を上げ、京と目を合わせてから、再び、

「申し訳なかった」

と更に深く頭を下げた。

「気にしないでくれ。君は疑問を解決しに来ただけだ」

端から『誤っている』と決めつけられたことにはさすがにむっとしたが、配属されたばかりという気負いがあったからだろう。

京は外見にかまわないことからわかるとおり、もともとおおらかな性格をしていた。あまり怒りを引き摺ることなく、相手が間違いを認めた場合はすぐに許して握手を求める。争い事を好まない質である彼は今回もいつもどおり、藤川に向かい右手を差し出し、和解を申し出たのだった。

「今後ともよろしく頼むよ、藤川君。確か俺のほうは自己紹介もまだだったな。廣瀬だ。廣瀬京。監察医を担当するようになって三年目だ」

「……………藤川です。よろしくお願いします」

藤川は複雑そうな表情をしつつも、京の手を取り、ぎゅっと握り返してきた。

「君、何か武道やってるの？」

どう見ても自分のほうが年上だと思ったのと、京はもともとフランクな性格をしており、捜査一課の若手とはこうした調子で話していたための口調だったのだが、藤川は『馴れ馴れしい』とでも思ったようで、敢えて敬語で接してきた。

「柔道、剣道、合気道、それに古武道を少々やっています」

「凄いね。道理で隙がない」

挑むような目を向けられ、『握手』としてではなく力の強さを示すために尚も強く手を握ってきた彼に対し、生意気だ、といったマイナス感情を京が抱くことはなかった。

逆に、面白い、と好印象を抱いたせいもあり、言わずにすませようとしていたことを敢えてここで京は藤川に告げることにした。

「ところで藤川君、君、もしや最初の挨拶でかなり生意気なことを言ったんじゃないか？ 捜査一課の面々をむっとさせるような」

そう告げた途端、藤川の様子がさっと変わった。今までも充分、好意的とはいえない仏頂面ではあったが、今やはっきりと攻撃性を前面に出し、京を睨み付けている。

「だからこそ、誰にも止められなかったんじゃないのかな？ ここに来ることを」

睨まれることは想定内だったため、笑顔のまま京はそう続け、未だ握られていた藤川の手をぎゅっと握り返したのだが、藤川はそんな京の手を乱暴に振り払うと一言、

「余計なお世話だ！」

と言い捨て、物凄い勢いで部屋を出て行ってしまった。

ボタン、とドアが大きな音を立てて閉まるまで、京をはじめとする室内にいた助手たちは、藤川の姿を目で追っていた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>